

外邦図の集成と多面的活用：アジア太平洋地域の地理情報の応用をめざして

The compilation and application of Japanese military and colonial maps

小林 茂(大阪大学文学研究科)

Shigeru KOBAYASHI (Osaka University)

1945年8月まで、日本がアジア太平洋地域で作製した地図を「外邦図」と呼んでいる。外邦図は60年以上前の景観を示す資料として、都市や耕地の拡大、森林の破壊や再生など、人為的改変の大きなこの地域の環境変化を考えるうえで重要な意義をもつと考えられる。本シンポジウムでは、こうした外邦図の集成と公開に関連した内外の努力と成果を報告し、今後の活用について考えたい。

1. これまでの成果と外邦図の全容

2001年に外邦図研究を本格的に開始して以後、東北大・京大(文・地理)・お茶大の目録を集成・刊行するほか、外邦図デジタルアーカイブの作成と公開、さらには当時の関係者へのインタビューや資料の刊行をおこなった。その結果、外邦図の概要について理解がすすんできた。

このなかで最も重要なのは、整理・目録化が進行した大学所蔵の外邦図(総種類数約1万4千。宮澤ほか 2007)は、終戦直後に参謀本部に架蔵されていたものを中心としており、朝鮮半島で臨時測図部が作製した1/5万地形図(のちに「略図」として刊行)や台湾で土地調査事業とともに作製された「台湾堡図」のような古い時期のものは、基本的にふくまれていないという点である。したがって、外邦図の全容を把握するには、より古い時期に作製されたものをふくめ、大学以外の機関が所蔵するより大きなコレクション(総種類数約2万3千、長岡 2004; 田中 2005)を検討する必要がある。

このコレクションの目録とされる『国外地図目録』・『国外地図一覧図』を検討して、もうひとつ留意されるのは、臨時測図部あるいは陸地測量部設立以前に作成された初期の外邦図(国立公文書館や国立国会図書館に架蔵)がふくまれていない可能性が大きいという点である。日本軍将校の朝鮮半島や中国大陸、台湾における測量(その多くは秘密測量、村上 1981)の成果は、とくに日清戦争時に使用されたと考えられるが、それらについては別途追跡する必要がある。

2. 新たにみえてきた個別課題

他方、この間あきらかになってきた個別課題もすくなくない。これまでの朝鮮半島の初期外邦図の調査をふまえ、アメリカ議会図書館で調査をおこなったところ(2008年3月)、上記の初期外邦図の原図(手書き)が相当数発見された。中には好太王碑文について報告した酒匂景信によるものもあり、早急な調査が必要である。またこれらの図が『国外地図目録』に掲載されなかったとすれば、米軍による接収も背景として考えられ、その経過の検討が要請される。

ところで、台湾や朝鮮半島では、学術資料として外邦図に関心がよせられており、施添福氏(中央研究院)による『臺灣堡圖』(1996年)および『臺灣地形圖：日治時代二萬五千分之一』(1999年、いずれも远流出版公司[台北]より刊行)、さらに南榮佑高麗大学教授による『舊韓末韓半島地形圖』(圖書出版成地文化社[ソウル]、1997年)のようなリプリントと解説がすでに刊行されている。このような政府や軍機関による地形図だけでなく、都市計画図(黄編 2006)や吉田初三郎をはじめとする画家による鳥瞰図(莊編 1996)、にも類似の関心が広がっている。また『近代中国都市地図集成』(柏書房 1986)や『中国商工地図集成』(柏書房 1992)からも、都市地図や商工地図が日本人業者に作製されたことがうかがえるが、その概要は一部を除いて知られておらず、本格的な研究が要請される。とくに植民地期の都市景観の変化を研究する場合には、この検討は不可欠であろう。

こうした多様な外邦図を広範な利用に供するには、同時にそれぞれの精度評価が不可欠であり、日本軍や植民地政府作製のものにくわえ、外国製地図の複写図についても、その作成過程に関する研究が要請されている。中国大陸の場合、日本の臨時測図部による仮製図の精度は低いと指摘され、旧満州などではその克服がこころみられていく。民国製の地図を複写したものについても、高木菊三郎が試みたような精度評価(大阪大学所蔵資料)をこえて、中国側の地図作製史とあわせて理解す

べきものであろう。

他方、こうして評価された外邦図を他の時期の地図や空中写真、衛星写真と比較対照する枠組みも開発する必要がある。広範な景観変化が確認されるとしても、それを量的に把握するためには、各資料の位置情報が整合的に統一されねばならない。また他方で、外邦図がひろく利用されるようにするには、こうした厳密さにはこだわらずに、Google Earthのような広範に用いられている地図情報との連携も図っていくべきである。

さらに、これまで整備してきた外邦図デジタルアーカイブをさらに発展させるためには、資料の提示や保存において、技術的な改良が必要なだけでなく、その維持という点まで考えると、大学という枠組み以外についても検討の必要が感じられる。サービスの維持管理さらに発展を考えるには、恒常的で継続性の高い組織が必要と考えられる。

これに関連して、外邦図デジタルアーカイブは、ひろく海外の利用者を想定する必要がある、その便宜だけでなく、それぞれの地域における地図利用との整合性も考慮する必要があると考えられる。とくに中国の場合は、大縮尺の地図の利用だけでなく、経緯度についても分以下のデータは機密とされ、GPSの使用も許されていない(岩田 2008)。日本軍が複写して使用した民国製地図の多くが、1937年の南京事件に際し、その参謀本部・陸地測量總局で「鹵獲」したものである(高木 1941; 1992: 213-240)という経緯もふくめ利用の可能性を判断すべきであろう。

3. 本シンポジウムのねらい

以上のように、外邦図の本格的利用にいたるには、まだ克服しなければならない課題が多い。本シンポジウムでは、こうした課題にむけた取り組みを紹介し、今後への展望を考えたい。

山近久美子・渡辺理絵「アメリカ議会図書館所蔵の日本軍将校による1880年代の外邦測量原図」では、アメリカ議会図書館で発見された上記の原図について報告する。

魏徳文「(仮題)植民地期台湾の地図作製」は近刊の『測量臺灣: 日治時期繪製臺灣相關地圖 1895-1945』(台北: 南天書局)から植民地期の台湾社会

土地図との関係を考える。

鳴海邦匡・岡本有希子・長澤良太・小林茂「Google Earth と外邦図」では、近年整備されたGoogle Earthを外邦図の研究や表示にどのように利用できるか検討する。

村山良之・宮澤仁・関根良平「外邦図デジタルアーカイブの作成と公開にともなう課題」では、試行錯誤的にすすめてきたこれまでの作業を回顧するとともに、今後の課題について考える。

田村俊和(立正大)「外邦図の非軍事的活用と公開をめぐる」は、これまでの外邦図の活用例を検討するとともに、それを公開して内外の利用に供するには、どのような課題があるか検討する。

演者らは2004年秋に「外邦図の基礎的研究」と題するシンポジウムを行ったが、調査や研究が進むにつれて新たな課題が視野にはいり、作業を展開してきた。また海外の研究者の関心を知り、連携をすすめている。その過程で、外邦図はアジア太平洋地域の近代史のなかで作製されてきたことをつよく意識するようになった。外邦図の国際的かつ多面的な研究と活用を今後どう進めるか、多くの意見と助言をいただきたい。

なお、演者らのこれまでの研究には、科学研究費(基盤研究・データベース)、国土地理協会ならびに三菱財団の助成をえたことを付記しておきたい。

文献

- 岩田修二 2008. 中国の山岳地図. 地図情報 28-1: 14-17.
- 黄武達編 2006. 『臺灣都市發展地圖集』台北: 南天書局・國史館臺灣文獻館.
- 莊永明編 1996. 『台灣島瞰圖』台北: 遠流出版公司.
- 高木菊三郎 1941. 『外邦兵要地図整備史』陸地測量部(藤原彰編、不二出版、1992).
- 田中宏巳 2005. 史実調査部と地図の行方. 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学人文地理学教室, 35-43.
- 長岡正利 2004. 外邦図作製の記録としての各種一覧図と地理調査所における外邦図の扱い. 外邦図研究ニューズレター2: 17-23.
- 宮澤 仁・高槻幸枝・大浦瑞代・田宮兵衛・水野 勲 2007. お茶の水女子大学所蔵外邦図コレクションの全体像. お茶の水地理 47: 1-13.